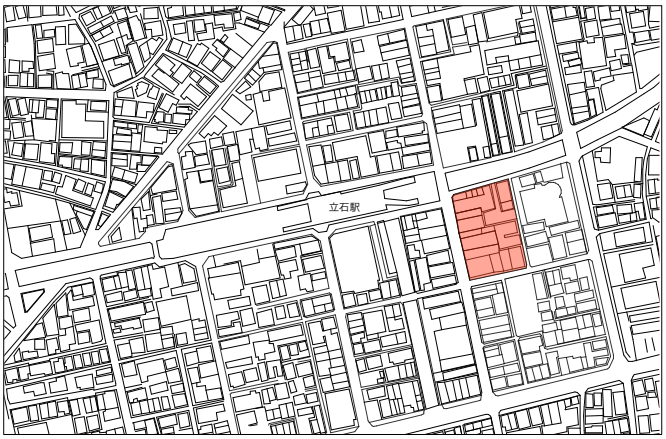
つながる距離、つなげる街

中野涼太
建築設計計画研究室

敷地　東京　葛飾　立石

私が今回選定した敷地は戦後闇市の姿を残した仲店商店街や呑んべ横丁の近くである立石駅前である。立石では隣近所と関わって来た事で生まれたコミュニティがあり、とても暖かい人柄を感じる事が出来る。しかし、立石は生涯を地元で過ごす人が多く、建物も低層であるため新しい人を迎え入れる余白がない。また、取材に行った時に商店を継ぐ人がいない事を嘆く人が多くいた。



コンセプト

地域コミュニティを育んでいける町づくりを設計する。現代人の多くは求めるコミュニティが変化して来ている。それは共通の趣味や興味などのモノを通してコミュニケーションをとる事を心地いいと思っているということだ。モノを通してコミュニティをつくる現代人と隣近所と関わる事でコミュニティをつくる立石の人を繋ぐために住んだ人や商いを行う人が個性を吐き出せる余白を設計する。

プログラム

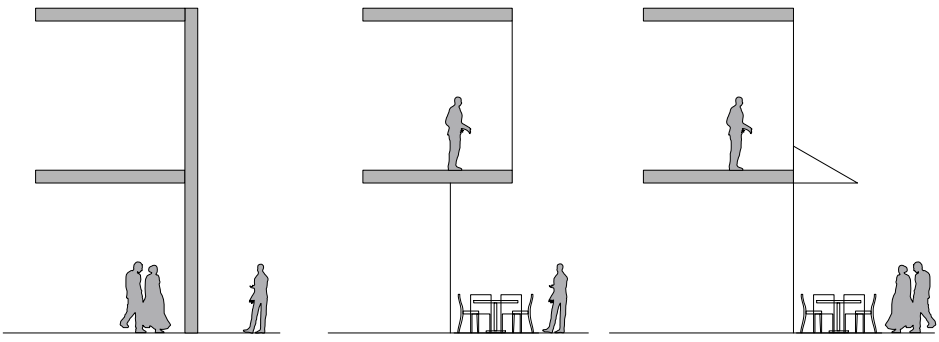
立石の足下が店舗、上部が住居というスタイルを継承し、街の連続性を意図する。店舗の溢れ出しの構成は、壁面を垂直にするのではなく凹凸を付ける事で店舗と道の境界が曖昧になり、道に店の要素が溢れ出し今の立石にある雑多な雰囲気が出てくる。上部の集合住宅は部屋を借りるのではなく、スラブを借りる。住んだ人はライフスタイルの変化に合わせて増改築し、この街に住み続けられ結果、コミュニティの壊れない街が出来る。

溢れ出す構成

路地空間や商店街で起こる現象

デザイン

店舗同士を半屋外空間と路地的空間が繋ぎ、街全体として歩いていて楽しい空間が生まれる。集合住宅で長い時間住んでいるとモノが増えて溜まってくる。そして外に出ていいものは自然と外に出て来る。その外部空間は隣り合うスラブのレベルを変える事とオープンプライベートとクローズドプライベートの２つを持つ事で外での活動時間が増え、住んでいる人の趣味やキャラクターが解り、そこからコミュニティが形成されます。



壁面を垂直にするのではなく凹凸を付ける事で店舗と道の境界が曖昧になる。

駅方面から広場へ延びる道

路地にはわずかな光が落ちてくる

既存の路地から延長された道

イベントを許容する広場